王たり、詩に曰く、普天の下王土にあらざるなく、率土の濱王臣にあらざるなしと、我苟くも仁義の道を守り、天爾己に備りますれば、天下の御大事を承りましては聞捨てがたく罷り出で候事若し心得違ひに候はゞ、如何なる御咎を蒙り候ともいとひ御座なく候、……只々天下國家の御爲め、邦君の御愼み御開さになさせられ候はゞ本懷の至りに候、すみやかに御聞さどゞけたまはらば、廣大の御慈悲と奉存上と申上ぐれば……其日の役所は下げられたり。

（此項未完）

○前號正誤　四十頁十四行運合の傍訓は（つれあひ）とあるべし、配偶の意なり、また四十三頁二行（つゝみの庭の道）はつゝみの夜の道の誤

# 偉人の學校時代（一）

## ノーフォルクのチルソン

米溪

ホレシオ、ネルソン、生れながらにして、活達敏捷、愛憫の情深く、又、高潔なる心性を有せりしかば、卯角相集まりて嬉戯するに當りては、擧措自から、嶄然群を抽けり。彼はエドマンドとカザリンチルソンとの間に生れたる第五男にして實に其の第六子なり。紀元一千七百五十八年ノーフォルクの片田舍の村里、バーンハム、ドープに於て生る。父時に、其の地の監督牧師にして、家は即ち、寺院の一舍なりき。

母は、少時は、サックリングと云ひ、其の祖母は、サーロバート　ワルポールの姉なりしかは、チルソンの名も、後に、其の敎父の命ずる所にし

て初めは、ロード、ワルポローと呼ばれしなり。

ネルソンの幼時は、餘り强壯ならず、且つ當時イングランドに於て、最も廣く流行せし疾病の一なる、瘧の爲に、大に其の勢力を減殺せられたるが如し。然れども、其の毅然たる精神と、高潔なる心事は、到底沒却し得べきにあらず、試に、其の經歷を一瞥せよ。勞苦と戰び、光譽を望むに際しては、必ずや、直ちに、人をして、其の凡庸に卓越せることを首肯せしむるもの在らずんばあらざるなり。

其の幼時、祖母の家に寓するや、嘗て、一小童と共に、鳥の巢を涉獵らんが爲に吟行ひぬ。午時既に過ぐるも、ネルソンの姿は認められざるなり。家は殘る隅もなく尋ねられしも在らず、一家の驚愕漸く大にして、遂に或は誘丐者の爲に致されしにあらずやと迄心を痛むるに至りぬ。家より野山の邊迄、人手を分ちて、殘らん方もなく索めしが、竟にネルソンが、小河の涯に、涉ること能はざるまゝ、泰然として、獨り座せるを發見せり。伴ひて家に歸るや。祖母は其の顏を見るより、馳せ寄りて曰く、「驚くべし、餓を知らずや畏ろしきことあらざりしか、何とて家に歸らざりし」、と云へるに、「畏れとよ、予は畏れなることを知らず。其は抑も、何者ぞや」。とは未來の英雄の平然たる答なりき。

ネルソン最初、其の居村の小なる學校に送られしが、閑暇ある毎に、市場に於て、彼の姿は見られぬ。而して、彼は遂に、ナイフを以て、一の小船を造り、紙帆を裝ひぬ。此に於てか、更にポンプを以て働き初め、其の小さき學友の助けにより充

分船を浮ぶべきだけの一池を成し、其の技巧によりてなりたる船を浮べ、以て樂みとしたり。其の愛憫の情深きことは、既に此の少年時代に於て、偶然の事によりて示されぬ。ダウンハムの靴工の家に、一匹の小羊を飼ひて、非常に鍾愛し常に之を、其の店頭に居らしめしが、偶々、チルソン思はずも、其の入口の戸を開かんとして、之を其の柱との間に挾みしが、悲鳴に驚きて、直ちに放ちしも、此の時の、小羊に與へし苦痛に付ては、心中、堪へ難き悲みをなしてより暫時は其の情の忘るゝこと能はさりしと云ふ。幾千の將士をして命を捧げ、死して悔なからしむるもの、實に此の心に存するにあらさるか。

チルソン次で、其の兄ウヰリアムと共に、ノースワルシャムの學校に送らるゝや、其の剛膽廉潔の資性は、端なくも、此に發露したり。當時、其の校長の庭園には、褐色の、玉を懸けたらんか如き梨の實の熟するあり。少年等は、其の上級生の言に徴して、當然、自己等の獲物と思惟したりしと雖とも、少年中、豪膽を以て稱せらるゝものも尚は、疑懼して、敢て剽掠を擅まゝにする能はさりき。

チルソン是に於てか、夜、其の被衾によりて、身を寢室の窓より投下し、遂に其の菓を掠めぬ。然れども、彼の木の實と共に、其の室内に曳き上げらるゝや、得る所を以て、盡く之を其の學友の間に分配し、少しも自から殘す所なく、人の其の所以を聞くものあれば、徐ろに答へて曰く、我は唯、之を取りしのみ、然らされば、彼等は畏懼して、到底手を下すこと能はさればなりき。

チルソンの母は、一千七百六十七年、八人の孤兒を殘して逝きぬ。此に於てか、其の弟當時海軍士官たりし、モーライス、サックリングは寡夫の家を吊して、其の遺子の一人は、自から之を訓育せんことを約したり。

其の後三年、チルソン時に年十二、クリスマスの祭日を以て家に在るや、彼は其の地方の新聞紙を讀みて、其の叔父の、砲六十四門を有せる、レイゾナブル艦の乘組を命せられしことを知りぬ是に於てか、彼よりは一歳半の長兄、ウキリアムに迫りて曰く、「請ふ我が爲に家父に書を送り、予が海上生活を好むを以て、行て、叔父の下に在らんと欲するの意を告げよと。

父時にベースに在り。情狀最も窮迫を極めしが、チルソンの提議を見て、其の眞意の有る所は寧ろ、其の境遇を察して自から事に從ひ、以て父を助けんとの冀望に出でしを知り、敢て其の決意に逆はず。蓋し、其は深く、其の子の性格を知了したりしなり、其の生平人に語るや、曰く、此の兒夫れ大事をなさん其の位置に從て事に當り、恐くは攀ぢて樹梢に及はんとすと。

之によりて、サックリングは、遂に返翰を載しぬ、「兄弟の中、尤も虛弱なるボレシヲが、家を離れて、荒き海上に、身を處かんとするは、柳も何なる事ぞや。好し、兎に角も來らしめよ。先つ其に、吾人の動作を試むべし。砲丸は、彼をして、其の考を廢てゝ、直ちに、心に備ふる所あらしむるを得んか」。と。

チルソン等の、ノースワルシャムの學校に歸るや、間もなく、春寒峭嶺、濃霧尙は四境を罩むる

朝未明に、家僕の、父の消息を齎らし來るに會ふ之れ乃ち、ネルソンが期待せる所の、叔父と共に、其の艦に乗込むべしとの音信なりしなり。

然りと雖とも、ネルソン、今や、一方に於ては長くその研鑽の窓を共にせし、其の兄、ウキリアムと別れさるべからざるなり。身未だ漸く弱冠ならで、前途の事亦茫洋知るべからず。幾年相擁して、常棣樂を同うせしものも、明日よりは、千里漂浪、一言相問はんとするも、烟波空しく恨を寄せんとす。其の去らんと欲して、互に相顧みるに當りてや、胸中果して、奈何の情をかなしけん。

ネルソンは倫敦迄は、其の父と同行せしか、此の時に當り、レイゾナブル、碇泊して、メドウエイに在り、而してネルソンは、獨りチエサムの棧橋に置かれしか、到着するや、先づ他の旅客等と共に座せしも、倘ほ、前途の方法を考究せんとして其處を立ち出で、遂に、船に達し得べしとにもあらざるも、身を切るが如き海風に晒されつゝ、彷徨すること幾時、一士官、忽ち、其の少年の寄る邊なく吟行する樣を注視し、彼に其の來歴を問ひしが、計らずも、之れ叔父の知人なりしかば携へられて其の家に至り、休息することを得たり。其の後遂に、目的の艦に乗り込むを得しと雖とも、便りとせるサックリングは、折しも艦内にあらず滿艦一人の情を寄する知人もなし。此に於てか、彼は遂に詮方もなく、誰顧みるものもなき内に、其の日は、終日甲板に於て徐かに歩み暮したりしか、翌朝迄は、遂に彼を愛憫せよ、との言は聞かれさりき、サウセー、此の時の情を説明して曰く「吾人の初めて、遠く天外の異域を指すに當りて

や、其の情に感ずる所、果して如何。悲涼凄愴、恰も、生氣充分滿ちたる樹枝を、其の母幹より裂くが如く、全生涯に於て、忍ぶべからざるもの〳〵内に、最も辛刻、情を痛ましむるものにあらざらんや。

温かなる恩愛の名殘、尋ぬるに由なく、慈親の笑顔、遂に仰ぐべからず、兄妹の友愛、掬せんと欲して獨り自から吊するが如きに至りては、四邊の境遇昔日と選を異にし、胸中感する所唯蕭々、悲歌耳に在りて鄉天迥に望むべからず、心裡の荒寥消磨し難くして、胸中の悶々深く腦底に彫られ神喪し、氣沮み、遂に其の情を毀傷し了る者、亦少〳〵にあらざるなり。蓋し、其の家鄉の天を出つるに當りては、生涯の運命を擧げて河流の中に投入するが如きの感をなすを以てにあらずとせんや。



況んや、生を碧海波濤の間に托するに當りては、身は筋骨を勞して安慰なく、靜に体を横へて華胥の樂を擅にするたに能はざるに於てをや。

チルソン今や、虛弱なる一身を提げ愛に充ちたる心を抱て、此の間に投す、生涯遂に、忘る能はざりしものは、乃ち此の當初の困苦にあらざらんや。其の生涯と、幼時に付ては、チルソン自身の記述あり、曰く、

予は紀元千七百五十八年九月二十九日、故家に生れしが、初めノーウイッチの高等學校に送られ後ノースウエーイに移りぬ。其の後、フオルクランド島問題起りて、スペーインと難を搆ふるや、予は、當時、叔父、砲六十四門を有せる、レイゾナブル艦の乘組マウライス、サックリングにより て海上に事に從ひしが西班牙に對する準備として

ヒッパート、バーリノアホートンの西印度船乗組となりて、ジオン、レースボーン君と共に差遣せられぬ。レースボーンは以前、サックリングと共に、職を海軍に奉したる人なり。

航海功を終へて、チエーサムに凱旋せしは、正に千七百七十二年七月なりき。若し夫れ、予をして進歩せる教育なからしめんか、艦隊に軍職を奉ずることの畏懼より轉して、通常の航海者となり、前の有力家、後の篤行家たりとの傳説を殘して、一の航海者を以て終りしやも、亦知るべからざるなり。云々。

イギリス史、否、寧ろ、世界史上卓然たる一英雄、ネルソン生涯の立脚地は、斯の如くなりき。

其の偉蹟と光榮に至りては、之を筆にすれば、光彩餘りありて、却て其の實を傷けずんば あらず。ネルソンの逝くや、舉國吊するに國民の不幸を以てし、哀悼至らざるなかりき。而して、サウセー獨り謂へらく、「彼は決して夭折せりと云ふべからず。彼の死、豈痛哭すべきものならんや。大効既に成りて、偉勳人心を照す、以て悔なかるべく、光榮至らざるなく、聲譽世を動かす、何の悲むべきものか之れあらん」と、之れ、其の眞の偉人を評せる至言にあらずや

## 新光

雨峰

時のながれ　限り知られず
遠く遠く　歷史の塚に
消えてゆくか　過去の過去には